武術散打の形成及び変遷過程に関する研究
－１９７９年から２０１３年まで－

スポーツ文化研究領域
５０１７Ａ０３１－４　周　明哲　　研究指導教員：志々田 文明 教授

本論文の目的は、1979 年より形成、発展してきた中国競技武術の武術散打を研究対象とし、その 1979 年から 2013 年までいかにして発展、変容してきたかの過程を明らかにする研究である。以下の課題を検討することを通し、中国武術事業全般を管理する中国武術運動管理センターの方針を含めて検討した上で、武術散打は最終的にどこまで発展するのかについて提言する。

(1) 武術散打の母体となる散打 T は古代中国及び中華民国期においてどのように発展、展開されていたか。 武術散打の形成及び変遷過程を理解しようとするなら 1949 年中華人民共和国建国以前の散打 T 発展状況に対する認識が必要である。特に 1911 年中華民国建立後、中国の政治・経済・文化などの激変は武術の発展に対しても重大な影響を与え、武術に劇的な変革が見られた。この時期において散打 T がどのように発展変化し、展開されていたかのかについて考察する。

(2) 1949 年から 2013 年まで競技スポーツとしての武術散打がどのように形成、変容してきたのか。第一段階として 1949 年から 1978 年の 30 年間における散打 T の状況を概観し、特に 1979 年に行われた武術散打試行活動は具体的にどのように展開されていたのか、また武術散打は伝統武術と武術套路の間にどういう繋がりがあるのかについて分析する。第二段階として 1979 年から 2013 年までの武術散打の発展について 1979 年以後に制定されていた武術散打競技規則の視点からアプローチし、武術散打の変遷過程について考察する。

第一章

本章では武術散打の母体となる散打 T は古代中国及び中華民国期においていかして発展、展開されていたかについて考察した。

〇中華民国建国前の散打 T（1911 年まで）

散打 T、古代では卞、白打、相搏、搏撃、手搏などと称されていた。古代の試合は舞台の上で行われていた原因で、試合の形式はまた「打擂台」と称され、散打 T は古代にいて軍事訓練内容の一つとして重視されていた。原始社会の人々は武力を以て狩りを行い、部族間でしばしば戦争が起こり、武力は部族間における富を略奪ことが散打 T の萌芽である。

中華民国成立前の中国において「散打 T」は軍隊や民間において盛んに行われた。試合中に突き技・蹴り技・肘打ち・膝蹴りなどを用いて自由に打ち合い、開始する前に「生死状」（生死不問）に署名するというのが中華民国前「散打 T」代表的な特徴とも言える。しかし、この時期の散打 T には競技規則まだ制定されておらず、死傷者が多く出た。よって中華民国前の散打 T はまだ近代的な競技スポーツ種目にはなっていないと分かった。

〇規則による散打 T 競技（1911-1949）

中華民国建国後、中国武術は西洋スポーツの急激な伝播によって大きな衝撃を受けた。特に西洋スポーツ競技の形式が中国武術に深甚な影響を与えた結果、散打 T にも競技化の萌芽が現れ始めた。民国期において散打 T の試合は延べ五回行われていた。中央国術館が 1928 年と 1933 年に南京で行われた二回「国術国考」（国術国家試験）、1933 年の第五回全国運動会及び 1929 年に杭州で開かれた「国術遊芸大会」及び 1929 年に上海で行われた国術大会がその代表的なものである。

中央国術館の国術国考の規則は主にボクシング試合の規則を参照し、防具と体重階級制度採用され、「套路 T」と「散打 T」の「打練結合」の試合モデルが形成した。中華民国時期の全国運動大会は第五回に散打 T の試合があることを除き、その他の全国運動会において中国武術は全部套路の形だけで行われていた。そのために中華民国時期の全国運動会は套路 T をメインとする武術発展方向に向かった。中央国術館副館長であった李景林が組織した二回の散打 T 大会は防具の不使用や体重階級分けを採用しないことにより伝統武術の特徴を十分に表したが、多くの死傷者が出た。この三種類の試合モデルは散

打Ｔの競技化における三つの異なる方向を反映している。その三つの方向は1979年により発祥してきた武術散打の見本となる。

この時期の中国武術は徐々に一つの独立するスポーツ種目に生まれ変わり、これは中国武術が競技化する発端と考えられる。

第二章

本章では、1949年から2013年まで競技スポーツとしての武術散打がどのように形成、変容してきたかについて考察した。

1949-1978

当時、国民党と共産党の内戦が終結したばかり、一部の武術社会組織の内部は状況が複雑だったため、1955年北京で開催した全国体育工作会議於いては「武術活動は主観的な要因や客観的な要因によって暫く規模を縮小する」という方針が提出され、散打Ｔに関する活動は一切停止され、1978年までは散打に関する訓練や競技大会などは一切行われていなかった

1979-2013

1978年の後半から国家体育運動委員会によって北京体育学院・武漢体育学院・浙江省武術チームは武術散打の試験地に指定され、武術散打技術と競技方法の研究が開始された武術の対抗競技が正式な議題として検討されるようになり、全国の武術散打の試行活動の幕が開けられた。1979-1988年は武術散打の実験期であり、　実験段階の武術散打はまだ正式的な競技種目になっておらず、試合は全部デモストレーションという形で行われていた。1989-2013年は武術散打の快速発展期と成熟期である。1989年より、国家体育委員会（現在国家体育総局と称す）は武術散打を正式的な競技種目とし、毎年開催する武術散打大会を「全国武術散打選手権大会」と正式に命名した。1992年にソールで開催された第三回アジア武術選手権大会において、武術散打は初めて正式的な競技種目となり、1998年にタイバンコクで開催されたアジア運動大会において、武術散打が正式競技種目となった。2000年3月に、中国武術散打王争覇戦が北京で正式に開幕され、武術散打がプロ化への第一歩を踏み出した。この間、武術散打競技規則は幾度も修正され、正式的に刊行されていたのは1990年版、1996年版、1998年版、2013年版、総計４冊だった.

毎回散打規則の修正は武術散打の発展方向を示している。1990、1996、1998年版の規則は1979年に制定された“積極、穏当”の方針に従い、選手の安全要素を第一位にしており、その反面、選手は「勝利至上主義」だ。2013年の規則から見ると、「突き技、蹴り技及び投げ技使用率のバランスを確保し、攻防の積極性と試合の鑑賞性をより一層上げる」というのは2013年版規則の主要意図であると理解された。

第三章

2017年、武術管理センターは中国全国武術工作座談会を開催した。その内容は、１）武術の国際化を中国外交戦略の一環として推進すること、２）中国武術管理制度の改革は国家体育総局及び武術運動管理センターの現行管理体制から離れることができないこと、３）武術散打のプロ化を重視することと集約される。本章ではこの方針を踏まえ武術散打の将来について以下の提言を行なった。

(1)武術管理センターの最終目標は武術散打をオリンピック種目にすることである。オリンピックを一種の外来文化として見れば、オリンピック種目になるのを武術散打国際化の最終目的と考えても良い。テコンドーがオリンピック種目になれたのは「簡潔な技法」「得点判定一目瞭然」などの特徴を持ち、競技性や観賞性などを重視し、伝統性や民族性の問題に足を引かれず、積極的に変化した結果と言える。その経験も武術散打の参考になると思われる。

(2)2000年に中国において初めての武術散打プロ大会が北京で開催された。武術散打チーム及び選手は依然武術運動管理センターよって管理されており、プロ武術散打の定義の標準から見れば、武術散打プロ大会はまだ完全に市場経済を導きとしていなく、完全なる体育商品ではなく、中国の武術散打プロ大会はいわば半プロ大会にすぎない。武術散打のプロ化が最初にすべくことは本当のプロ化チームを作り、健全な法律保証体質を築き、市場経済を導入して、徐々に武術管理センターの行政化管理から離脱すべきだと考える。

主要文献

●中国武术研究报告编委会（2017）中国武术研究报告，北京；社会科学文献出版社